

# 小川未明の漢詩(2)

—東京専門学校時代の詩業

増井真琴

はじめに

本論は、その表題からも明らかのように、初発の論文ではない。以前著した、拙稿「小川未明の漢詩——高田中学時代の詩業」(『日本漢文学研究』平成三〇年三月)の続編という位置付けである。

先の論稿において、筆者は、新潟・高田中学時代(明治二八—三四年)に小川未明——当時の健作少年——が紡いでいた漢詩一〇篇の読解を行った。筆者自身を含め、日本近代(児童)文学の研究者に、漢詩・漢文の素養が欠けている事情も関係しているのだろう。これらの漢詩は、長年、訓読文(読み下し文)すら付されることなく、ほぼ白文のまま放置されてきたからである。

白文放置は見過ごせない。そう考えた筆者は、自身が新たに発見した新資料を含む、すべての漢詩に、訓読文・語釈・通釈等を注記するとともに、これらの基礎作業から窺い知れる、後の文学作品との質的連続性を指摘した。また、明治維新以後、欧化政策の中で、失われゆく教養であった漢詩を、明治一五年

生まれの未明が物すことのできた背景事情や、未明漢詩が占める日本近代漢詩史上の位置についても、考察を加えた。

近代文学の研究者が、あまり顧みない漢詩に、何故あえてこだわるのか、と言えば、それはこれらの漢詩に、未明文学の原型が宿っていると考えるからである。つまり、明治期の初期習作には、後年の未明文学のエッセンスが凝縮されていると筆者は見る。先の論稿を発表してしばらく経つが、この立場は本論においても、何ら変わっていない。

小川未明の人と文学を理解する上で、漢詩の判読は重要なのである。したがって、以下本稿では、未明が高田中学を中退し、東京専門学校(早稲田大学)へ進学した明治三四年(満一九歳)の夏に詠んだ七言絶句四篇について鑑賞を試みるとともに(一節)、これらの漢詩が具有する技巧(技術的な質)と思想(内容的な特質)を明らかにしたい(二節)。

なお、本論で紹介する漢詩は——現在わかっている範囲では——小川未明が生前に残した、最後の漢詩である。

## 一、七言絶句四篇——友人・飯田庄八への葉書

本節で精読したいのは、漢詩四篇である。小川未明が新潟の高田中学を中退し、東京専門学校(早稲田大学)へ入学した明治三四年(満一九歳)の夏に創作された七言絶句だ。これらの漢詩はいずれも、地元の友人・飯田庄八へ宛てた葉書に記載されていた作品であり、これまで白文のまま見過ごされてきた初期習作である。

まず、飯田庄八とは何者か、という点について、簡単に触れておきたい。飯田は、高田中学の学生で、未明や相馬御風とは同窓の友。中学では、定期試験で成績一位を取るほどの秀才だった。また、未明や御風と同様、文芸部に所属し、文芸の研鑽を積んでいた。落筆を繰り返す劣等生と学年一位の優等生という対照的な組み合わせながら、馬が合ったのだろう。未明は飯田に対して、漢詩・俳句・新体詩・評論等の自作を載せた、数々の書簡を書き送っている。その習作の一部は、既に拙稿「小川未明の漢詩——高田中学時代の詩業」(『日本漢文学研究』平成三〇年三月)で紹介・分析した通りである。

さて、本節で読解する飯田宛の漢詩を発見したのは、中村昌司である。当時、高田で高校教員をしていた中村は、「エッセイ小川未明(文学)の故郷」(小川未明生誕百年記念事業実行委員会編『未明ふる里の百年』小川未明生誕百年記念事業実行委員会、昭和五八年五月)の「注7」で、これまで知られていなかった七言絶句四篇を、新たに紹介した。中村によれば、「上京後、東

京専門学校に入学した健作は、その年(明治三四・七)の暑中休暇に郷里春日山に帰省し、東頸城・菖蒲の友人飯田庄八宛(ハガキ)に、近作の「漢詩」四首を書き送っている。中村は、この葉書の手蹟を翻刻したのである。

葉書には冒頭、「謹啓 炎暑の候雅兄幸に筆硯御優勝の段奉賀候 此程玉什に接し一層御発達の程見受申候 近作二三記載致し候間御照覧被下度候」との挨拶書きが付されているが、この文面からは、東京専門学校進学後も、郷里の友人とそれなりの交友を続けていた様子が窺えよう。そして、上記の挨拶書きに続いて記されるのが、下記の漢詩四篇である。従前繰り返し述べている通り、これまで白文のまま放置されてきた初期習作である故、以下本節では、なるべく丁寧な玩読を試みたい。

なお、本葉書は、一般には公にされていない未公開史料である。したがって、以下、本論で鑑賞する未明漢詩の詩句は、中村の論稿に依拠しており、一次史料を使った裏取りができていないわけではない点は、あらかじめお断りしておきたい。また、中村の注は、住所・氏名等を含めた葉書の全文を翻刻したものではないため、葉書の差出人の名義が、本名の「健作」なのか、未明が中学時代用いていた「白洲」等の雅号なのかは、現状不明である。併せて、お断りしておきたい。

①「途上即吟」(飯田庄八宛葉書、明治三四年七月)

山。河。千。里。八。青。州。

何。處。今。宵。洗。馬。郵。 何。れ。の。處。を。今。宵。 洗。馬。の。郵。

遊・尽・仲・秋・帰・洛・日  
漸・親・燈・火・読・書・樓  
漸・く・燈・火・に・親・し・む  
読・書・の・樓

※州・郵・樓は下平の尤。

【語釈】▼八青州 関東八州のこと。武蔵・相模・常陸・安房・上総・下総・上野・下野の八カ国を指す。▼洗馬 長野県塩尻市にあった中山道の宿駅。昭和七年の大火で、ほぼ消失した。▼郵 宿場。▼仲秋 陰暦の八月。▼帰洛 都へ帰ること。【通釈】山河が千里に広がる、緑豊かな関東八州の地を、私は後にした。今夜宿泊する予定の洗馬の宿場は、一体どこだろう。帰省後、八月の間は、ただひたすら遊んでいたが、いよいよ都へ戻る日がやってきた。ようやく明かりを灯して、楼で読書をした。

②「過碓氷嶺（碓氷の嶺を過ぐ）」（飯田庄八宛葉書、明治三四年七月）

踏破・飛雪・第幾重  
飛雪を踏破すること ただ幾重  
岸頭・留馬・夕陽春  
岸頭に馬を留むれば 夕陽春く  
八州・青野・山川遠  
八州の青野 山川遠し  
一点眼中・妙義峯  
一点眼中するは 妙義の峯

※重・春・峯は上平の冬。

【語釈】▼碓氷嶺 長野県軽井沢町と群馬県安中市の間にある碓氷峠のこと。高田出身の未明が上京する際は、この峠を越える雁が鳴くのを初めて聞いた。そろそろ秋である。

④「夏日閑居（夏日に閑居す）」（飯田庄八宛葉書、明治三四年七月）

山村・書・静・思・徒・然  
山村 書静かにして思ひ 徒然たり  
潺湲・溪水・又・惹・眼  
潺湲として咽ぶ溪水 又眼を惹く  
終日・沈吟・詩未得  
終日沈吟するも 詩未だ得ず  
乱蟬・萬樹・夕陽天  
乱蟬萬樹 夕陽の天

※然・天は下平の先、眼は上声の漕（仄字）。

【語釈】▼潺 水の清らかに流れるさま。▼咽 咽び泣くような音を立てる。▼溪水 谷川の水。溪流。▼沈吟 静かに口ずさむこと。▼乱蟬 乱れ鳴く蟬。▼天 空。【通釈】山村の昼は静かであり、ぼんやりと物思いにふける。谷川の水は、清らかに咽び泣くような音を立てており、目を惹き付ける。一日中、あれこれと口ずさんではみたものの、詩はいまだにできない。夕暮れの空の下、蟬があまたの樹木で乱れ鳴いている。

二、未明漢詩の技巧と思想——押韻・平仄・出典／赤・鳥・月・南北対比

以上が、小川未明の七言絶句四篇である。次いで本節では、右記の漢詩がどのような技術的・内容的特徴を有しているのか、考察を加えたい。先の拙論「小川未明の漢詩——高田中学時代の詩業」（『日本文学研究』平成三〇年三月）では、四節「未

必要があった。▼踏破 踏破と同じ。踏み歩くこと。▼飛雪 風に吹き飛ばされながら降る雪。▼岸頭 岸のほとり。▼春 夕日が没する。▼八州 関東八州のこと。①語釈参照。▼妙義 群馬県南西部にある妙義山のこと。上毛三山・日本三大奇勝の一つに数えられている。

【通釈】吹きさら雪の中を、ただひたすら歩く。ようやく碓氷峠を越え、岸のほとりに馬を留めると、折しも夕日が没しようとしていた。緑が繁る関東八州は、山川に隔てられていて、依然遠い。一点、眼に入るのは、名勝として名高い、あの妙義山である。

③「客舍偶成」（飯田庄八宛葉書、明治三四年七月）

駿馬・一鞭・萬里征  
駿馬 一たび鞭てば 萬里を征く  
月魄・風物・異郷情  
月魄の風物 異郷の情  
夏天・過得・水村客  
夏天に 水村を過ぎ得たるの客  
今夕・初聞・孤雁鳴  
今夕 初めて聞く 孤雁の鳴くを

※征・情・鳴は下平の庚。

【語釈】▼駿馬 足の速い優れた馬。▼月魄 月。▼風物 風景。▼夏天 夏の空。▼水村 水辺の村。▼孤雁 群れから離れてしまった一羽の雁。

【通釈】駿馬は一鞭するだけで、万里の道を駆ける。月に照らされた景色は、まさしく、異郷の趣きである。旅人の私は、夏の日に、水辺の村里を通り過ぎた。今日の夕方、群れから離れた一羽の明漢詩の技巧と思想」で、未明漢詩が備える技巧（技術的な質）と思想（内容的な特質）を、それぞれ三点指摘した。記述が相当重複するが、今回もこの切り口に即して、論を進める。

まず、技巧（技術的な質）に関しては、押韻・平仄・出典の三つの観点から検討した。

押韻とは、句の末字に脚韻を施すことで、七言詩の場合、初句+偶数句で韻を踏むのが、作詩の基本的な約束事となっている。平と仄の二つの音の内、韻で使用しているのは平だけ。しかも、上平一五、下平一五の計三種の韻のグループ——「韻目」と呼ぶ——の中から、同じグループの漢字を用いて、全体を統一しなければならぬ。なかなかルールが細かいわけだが、未明の押韻は、右記の条件をほとんど完璧にクリアしている。唯一の例外は、④「夏日閑居」の承句の「眼」が、仄字（上声・漕）になってしまっている点である。

平仄とは、漢詩の詩句に課せられた音の規則性のことで、七言詩の場合、平と仄の関係は、二四不同・二六対でなければならぬ。また、七言詩の四字目が平の場合、その前後を仄で囲んではいけない孤平（●○○）の禁や、下三字を同じ音にしてはいけない下三連（○○○／●●●）の禁というルールがある。内、すべてのルールに関して、いくつか例外はあるものの、未明の漢詩は、基本的には、これらの制約に準じている。未明は漢詩を創作する際、『古詩韻範』『詩語釋金』『詩韻群玉』といった教本を参照していた由、回想しているが、勉強の成果であろう。技量は高い。

出典とは、詩句の背景にある題材のことで、和歌の本歌取りのように、先行する漢詩・漢学の素養を踏まえて、自作を構築できれば、学が深いと言える。先の拙論では、劉向『列女伝』、李瀚『蒙求』等に見られる『孟母断機』の故事や、杜牧の七絶『遣懷』「漢江」、頼山陽・藤井竹外らの日本漢詩「芳山三首」「吉野三絶」等が、典拠（元ネタ）として使用されている旨、指摘した。しかし、今回は残念ながら、このような出典を発見することは出来なかった。ただ、これは筆者の漢学の素養が乏しいため、単に見逃しているだけかもしれない。後学の批判を待ちたい。

次に、思想（内容的な特質）に関しては、赤好み・鳥好み・南北対比の三つの特性が確認できた。これらの特性は、後年の未明の文学世界とそのまま直結しているというのが、筆者の見立てである。

第一の特性は、赤（紅）色に対する嗜好である。周知の通り、未明の作品世界には、赤色が横溢している。「赤い船」（明治四三年）、「紅い入日」（明治四四年）、「鮮血」（大正三年）、「野薔薇」（大正九年）、「赤い蠟燭と人魚」（大正一〇年）、「血の車輪」（大正一一年）、「黒い人と赤い櫃」（同上）、「赤いガラスの宮殿」（昭和四年）、「赤土へ来る子供たち」（昭和一四年）、「赤いげた」（昭和二七年）等、その実例は枚挙に暇がない。

そして、少年未明の漢詩にも赤色は漲っていた。①「途上即吟」の「燈火」、②「過碓氷嶺」の「夕陽」、④「夏日閑居」の「夕陽」がそれである。未明の赤好みは、既に少年の日の習作時代から芽吹いていたのである。

それぞれ象徴されているのだという。

②「過碓氷嶺」は、この分析を援用して読み解くことが可能である。本詩では、雪の舞う寒冷な世界<sup>⑧</sup>北（飛雪を踏破することただ幾重）と、緑が繁る関東八州の地<sup>⑨</sup>南（八州の青野山川遠し）が、中山道に屹立する碓氷峠を境として、対比的に描かれている。本詩の詠み手が、上京・帰省の度に碓氷峠を通過する未明である事実を踏まえるならば、この北には冬や故郷のイメージが、南には春や（大学のある）都市のイメージが、それぞれ仮託されていると言えるだろう。未明の南北対比のレトリックは、少年期の漢詩において、その原型が確認できる。

さて、ここまで筆者は、かつて自身の論文で用いた切り口（および叙述）を作品分析に再利用してきたわけだが、ここで今回初めて気付いた新たな特性を指摘したい。それは第四の特性<sup>⑩</sup>月に対する嗜好である。

赤や鳥と同様、未明は月という語を好んで多用していた。「月の宮」（明治四三年）、「赤い月の上る前」（明治四四年）、「月光」（大正六年）、「月夜と少年」（大正七年）、「月に祈る」（大正一〇年）、「月夜と眼鏡」（大正一一年）、「負傷した線路と月」（大正一四年）、「月と海豹」（同上）、「暴風と月の妖術」（大正一五年）、「月と白壁の倉」（同上）、「月の中へ消えた鯉」（昭和九年）、「燕と月」（昭和一一年）、「昼のお月さま」（昭和一三年）等、未明の物語世界には月が頻出してはいる。

そして、少年未明の漢詩にも月は昇っていた。③「客舎偶成」の「月魄」が、それである。また一篇か、と顔を顰める向きが

第二の特性は、鳥（鶏）に対する嗜好である。赤と同様、鳥もまた、後に作家として名を成した未明が愛用する重要語であった。「海鳥の羽」（明治四〇年）、「燕と乞食の児」（明治四三年）、「木と鳥になつた姉妹」（大正九年）、「小鳥の死」（大正一一年）、「駒鳥と酒」（大正一三年）、「兄弟の山鳩」（大正一五年）、「幸福の鳥」（昭和三年）、「雀と鶉の話」（昭和五年）、「子鶯と母鶯」（昭和一一年）、「よろこびがらす」（昭和三一・三二年）等、こちらも例証には事欠かない。

そして、少年未明の漢詩にも鳥は出現していた。③「客舎偶成」の「孤雁」が、それである。わずか一篇では少ない、と思われる向きもあるかもしれないが、先の拙論では、全一〇篇中、四篇の漢詩に鳥が登場していることを確認しているから、本稿の「孤雁」も、決して偶然的の産物とは言えない。未明の鳥への愛念は筋金入りである。

第三の特性は、前二者ほど一般化できないのだが、一部の作品に、南北の対比構造が窺える点である。滑川道夫はかつて、「南」と「北」の対比構造が未明の一つの美学といえますか、未明自身の表現のレトリックの基本的なパターンの一つとして、あるような気がするわけです」（「未明童話における南と北の思想」『日本児童文学の軌跡』理論社、昭和六三年九月）と述べ、港に着いた黒んぼの話（『童話』大正一〇年六月）等を例示しながら、未明の表現形式の基本形に、南北対比がある旨、指摘した。滑川によれば、「南」には都会・理想・富・陽気・退廃・春といった要素が、「北」には故郷・現実・貧困・陰鬱・冬といった要素が、

あるかもしれない。が、これだけではないのだ。先の拙論を改めて見直すと、全一〇篇中、三篇の漢詩で、月の出演が確認できた。飯田庄八宛の俳句にも月は登場していた。未明の月好みは、大人になって急に生まれた嗜好ではなかったのである。

以上、本節では、未明漢詩が備える技巧（技術的な質）と思想（内容的な特質）を、それぞれ三つの観点から捕捉しようとしてみた。すなわち、押韻・平仄・出典と、赤・鳥・南北対比がそれぞれである。これらの技術的・内容的特徴——スキルとモチーフ——は、かつて拙稿で指摘したものが、唯一、典拠を挙げられなかった出典を除いて、本稿の未明漢詩にもそのまま当てはまる、と結論付けられる。さらに筆者は、今回新たな内容的特質として、月の頻出を指摘した。

少年未明の漢詩には、少年らしからぬ高度な詩才と、後年の文学世界と通じる創作上のモチーフが躍動していたのである。

#### おわりに——漢詩との別れ

以上、本稿では、明治三四年の東京専門学校（早稲田大学）入学直後に小川未明が紡いでいた、漢詩の検証を行った。これまで白文のまま放置されてきた七言絶句四篇に、訓読文・語釈・通釈等を施し、鑑賞を試みたのである。

その結果、明らかにになったのは、これらの初期習作が、押韻や平仄といった技巧の点で、極めて質の高いものであるという点である。少年未明の詩才は疑いを得ない。また、これらの詩作は、後年の未明の文学世界と通じる内容的特質を有してもい

た。すなわち、赤鳥・月・南北対比といった諸要素がそれである。上記の分析は、おおむね、既に拙稿「小川未明の漢詩——高田中学時代の詩業」(『日本漢文学研究』平成三〇年三月)で行った分析の反復に過ぎないけれど、月の頻出に関しては、今回初めて公にする新見解である。

ところで、本稿で紹介した七言絶句四篇をもって、未明の漢詩創作は跡を絶つ。これ以後、未明が紡いだ漢詩は、現状確認されていない。今後、新たな作品が発見される可能性もないとは言えないが、今のところ、本稿の漢詩が、この世に現存する最後の未明漢詩であるとして、差し支えないだろう。東京専門学校入学後、未明は漢詩の世界から、徐々に離れていったのである。

この点、漢学塾での体験を素材にした明治期の小説に、次のような記述があるのは、大変興味深い。東京へ進学した漢学塾出身の青年主人公が、上京当時の心境を述べた際の文章である。

当座、上野や九段へ遊んでも、本郷や、小石川辺に通ふ私塾の生徒を見ても一人として鈴木君〔漢学塾の先輩〕のやうな措大な時勢遅れの人はある。流石に東京の文華は新しい。〔漢書〕や、〔論語〕や、〔唐詩選〕を理想の書籍と有難がつてゐた自分は、今や、ツルゲネフや、ゾラや、キイツの傑作に接して無上の光栄と信じてゐる。此時若しや、老先生〔漢学塾の先生〕に電気燈の眩めき街頭で遇ふたからとて、自分は丁寧いそぎよくに挨拶することさへも潔いそぎよくとせなかつたであらう。

昭和五二年一〇月、同「エッセイ 小川未明(文学)の故郷」(小川未明生誕百年記念事業実行委員会編『未明ふるりの百年』小川未明生誕百年記念事業実行委員会、昭和五八年五月)、小川未明文学館編『御風と未明』(上越市、平成一九年二月)参照。

(3) 中村のエッセイは、昭和五〇年代の文章であり、大分昔の著作物だが、先の拙論を著す段階では、その「注7」に記されていた漢詩を、完全に見落としていた。先行研究の調査が不十分・不徹底だった点をお詫び申し上げたい。

(4) 押韻・平仄の調査や語釈の作成に際しては、大修館書店の『大漢和辞典』や小学館の『日本国語大辞典』等、各種の辞典・事典類を大量に参照した。改めて断るまでもないことかもしれないが、念のため、お断りしておく。

(5) 中村の論稿の記述に従えば、本葉書は現在、飯田庄八の遺族である海津家が所有しているものと推定される。

(6) 中村は詩の表題を「過確水嶺」と翻刻しているが、「確水」では意味が通らないことから、筆者の判断で「確水」と表記した。中村の翻刻ミスか。

(7) 中村は詩の二句目を「月魂風物異郷情」と翻刻しているが、「月魂」では意味が通らないことから、筆者の判断で「月魄」と表記した。中村の翻刻ミスか。

(8) ⑥「江村霜晓」(『中学世界』明治三三年一月二五日)の「残月」

⑦「春江夜曲」(飯田庄八宛書簡、明治三三年三月一七日作)の「月濱」、⑩「春郊矚目 其ノ二(其一者君既見)」(飯田庄八宛書簡、作成日不明)の「月照」が、それである。

(9) 「里川に女水くむ月夜かな」拙論三節参照。

「懐旧」(『新小説』明治四〇年五月)

本編の主人公は、東京遊学後、「漢書」「論語」「唐詩選」といった漢籍から、「ツルゲネフ」「ゾラ」「キイツ」らの西洋文学に、尊崇の対象が移っていった。そして、かつて尊敬していた郷里の漢学塾の先輩や先生を、旧弊な存在として、疎ましく思うようになった。

小説と作家の実人生を混同する愚は、厳に戒めなければならぬが、東京専門学校入学後の未明が、漢詩・漢文に以前のような熱意を感じられなくなっていたことは、本作の主人公の如く、事実であろう。かつて中野重治は、旧制第四高等学校から東京帝国大学へ進学後、短歌に情熱を抱けなくなった青年を自伝的小説「歌のわかれ」(『革新』昭和一四年四〜八月)で描いたが、未明もまた、上京を通して、「漢詩との別れ」を遂げていた。小川未明にとって、高田中学中退―東京専門学校入学は、漢詩・漢文の世界から離脱する、決定的な契機となっていたのである。

#### 注

(1) 本稿には、上記の拙論の他、筆者が平成三〇年度に北海道大学へ提出した博士論文「小川未明の総合的再考——詩業と思想展開を中心として」と一部記述が重なる点がある。記して、お断りしておく。

(2) 中村昌司「郷土・生い立ち・家系・小・中学校時代」(日本近代文学会新潟支部編『新潟県郷土作家叢書3 小川未明』野島出版

※漢詩の読解に際しては、二松學舎大学の牧角悦子先生より、多大なご指南を賜った。心より御礼申し上げます。

※本稿は、日本学術振興会特別研究員奨励費(課題番号:19J10024)による研究成果の一部である。

(日本学術振興会特別研究員PD)